

異月光夜

カラリと鈴が鳴る。条件反射でその方向を見たある女性、出入口の様子を確認すると元の仕事に戻った。

白とピンクを基調としたポップな飾りが店内のあちこちに彩りを与え、テーブル間の広々とした隙間の中を客の求めに応じながらスタッフたちは歩いていく。綺麗に口角をあげ、この店ならではの衣装を全身に纏った彼女もその内の一人であった。

一仕事を終えて顔を上げると、女性スタッフは軽やかに鳴り響く音を捉えた。出入口とは異なる人工的な音色である。彼女は瞬時に、お決まりのフレーズと共に一つのテーブルの元へと向かった。

(やっぱりあの人だよ。今日も来たんだ)

しかし、その明るい口調の裏で彼女はそんなことを考えていた。視界には、先程入店したばかりの若い女性客一人が映っている。

(この時間以外にも来てるって話だけど。ご近所だとしても、もっと良い店あるだろうに)

この店——通称、猫耳メイドカフェ——は当然一般客を主なターゲットとしていない、ある種の観光スポットの役割を持つ場所である。都会に憧れを抱く者、変わった体験をしたい者、遠い外国から訪れる者、そんな人々を受け入れ、楽しませることがこの目的だと彼女は考えていた。実際、ここに通う者は少数派で、いたとしても男性であることが多い。女性もいないことはないが、基本は団体であった。だからこそ、その客はスタッフたちにとって目立つ存在なのである。

(こんな店にハマるなんて、どうせ碌でもない人生歩んでるんだろうな。変わった格好を見るためだけに、一体いくら注ぎ込んでるんだか)

注文を口頭で繰り返しながら、女性がこっそりと金額

を計算すると三千円程度の額だった。頻繁に通うには少々懐を痛める食事代である。もちろん、これは単なるアルバイト生活の女性スタッフから鑑みた話でしかない。しかし実際に周囲の飲食店と比べれば、このカフェの物価は高く設定されていた。

(まあ、変わった趣味だとしても、金を落としてくれる人に文句はないけど。折角のお客様なんだから)

注文を厨房に伝えると、女性は別のベルの元へ向かう。要求されるままにカメラに笑みを浮かべ、会計口へ案内した。初々しい反応を見せていた男性客に、スタッフは表情を崩さずに気楽に対応していく。

迂闊な態度さえ取らなければ、この店で働く人々の評判が下がることはなかった。むしろ、多少の失敗は寛容に受け取られることがほとんどの、緩めの雰囲気の特徴である。基本的な接客対応さえ身に付ければ、次に重要視されるのはスタッフたちの容姿と性格のみであり、そんな仕事環境は、女性の気に入る点でもあった。

(給料だけで選んだけど、楽だし、ルールさえ守れば自由な辺りここは当たりだったよね。ちよつと皆と遊ぶくらいなら、普通にできるようになったんだから)

通り過ぎざまに目が合ったあの女性客に、彼女は気にする素振りを見せることなく、他の席に陣取る多くの変わった客たちに笑顔を振りまき続けた。

* * *

ヒラリと揺れる布地を、女性は目で追っていた。より正確に述べるならば、女性はふわふわと動くスカートを履いている人たちを眺めていた。

女性の目の前を何度も行き来するのは、彼女が訪れた

カフェで働く、メイドという名のウエイトレスである。注文メニューを決める傍ら、ウエイトレスの動きを、彼女たちの身に付けている制服を、眺めるのが女性の楽しみの一つであった。

黒、赤、紫、ピンク、水色といった色合いのワンピースに、フリルで囲われた真つ白なエプロン。肩口がふわりと盛り上がった袖。一部の界限に人気を得そうな姿の女性たちが、あちこちで接客をしている。しかし、いわゆるメイドカフェと異なる箇所が、全てのウエイトレスの頭上にあつた。

（今日は白い猫ちゃんが多いような気がするなあ）

過度な関わりを求めることなく静かに人間観察するところが、女性客の微かな趣味であつた。初めてここに来たときから、ウエイトレスたちは彼女の新たな対象物へと変化していったのだ。個々の人間を見たいという一心で、曜日や時間を変えては一人で度々と訪れていた。

（あ、今日のターゲットちゃん近くに来てくれた。まあいつもの注文でいっか）

「ご注文はお決まりですかにや？」

呼び鈴の付近に彷徨わせていた右手を着地させ、指の沈み込む感触がした直後、先程見つけたばかりのウエイトレスが人懐っこい笑みと共に近づいてきた。女性は普段通りの注文を唱えながら、白い耳を頭上に携えて、大きな瞳を向けてくるウエイトレスに視線を注ぐ。

モカ色に染められた髪、パーツの整った顔立ち、シンプルながらも色彩を放つネイル、リアルを十分に楽しんでいそうな装いだ、客は一目で判断した。

（いや、こういうタイプの店で働いて、こんな格好でも許されるんだから、そりゃあ楽しくもなるか。自由に好きを仕事にできる人って羨ましい限りだよ、ほんと。私

は一択だったからねえ

ウエイトレスがメニューを回収して立ち去ると、女性客のいる空間は再び静かなものとなつた。

（この仕事だつて、親に文句しか言われてないし。公務員が地方で何が悪いのさ。ぼっちなりに、いろいろ頑張ってきたんだけどねえ

入店以降、机に放置されていた水を手を取って、彼女は口元へと運んだ。ひやりとした感触を感じた女性が視線を下に向けると、女性の履いているジーンズにグラスから垂れた水滴が染みを残していた。

（ああ、やつちやつた。これ、父さんがいたら怒られてたね。——それにしても地味だし太いなあ、私は。これじゃあ、ああいう格好はどう足掻いても似合わないか。可愛いっていいなあ）

料理を運んでくる足音が聞こえ、女性客が顔を上げると、ウエイトレスの臀部付近にある尾が従来の位置からずれて見えることに気付いた。女性の瞳は細いものへと変わっていき、そこには羨望の眼差しが含まれていた。

* * *

ガチャリと鍵を回し、女性はロッカーの扉を開けた。その扉の先には、店側から用意された制服と、役目を与えられていないハンガー、彼女が以前入れた小物の類が揃っている。中の様子に変化がないことを一通り確認すると、女性はコートを脱ぎ、中のハンガーに粗雑に掛けた。持っていた荷物を下に置き、私服のボタンを外していく。

その背後には、同じようにロッカーの前に立ち、衣装を脱ぐもう一人の姿があつた。

（今日はこの先輩、もう上がるんだ。それにしても相変わらず貧相な体つきだね）

彼女にとつて、白い猫耳を片すその暗い後ろ姿は滑稽なものだった。そして、女性よりも勤続年数が二年上の先輩がいたことに気付いた上で、彼女は挨拶することなく黙々と洋服を脱ぎ始めていく。店先に出ていない間の過ごし方に強制されるものはない。彼女と先輩スタッフの関係は、淡白なものであつた。

（髪だつて色落ち始めてるし、爪だつて剥けてる。手入れなんて全くされてない。中途半端ならオシヤレなんてやめればいいのに）

ロッカーに収まっていた真つ赤なワンピースを取り出して袖を通すと、女性は静かに笑みを浮かべた。

（やつぱりこういう色は、私じゃなきゃあ似合わないよね。うん、今日も完璧）

手を後頭部に回して、肩まで伸びている半分程度の髪をサイドまで持ち上げる。そして、鞆から取り出した櫛で数度梳かすと、女性は片側の髪の毛をまとめた。反対側も同じように結び、ツイントールを作り上げる。髪留めには、魚の飾りが付けられていた。

（客には見えづらいけど、こういう工夫も大事よね。それにしても、先輩掛け持ちしてるって噂もあるし。どれだけ貧乏なんだろ）

メイクを直すために女性が覗いた鏡には、私服に着替えた先輩スタッフの後ろ姿が映っている。着古しているのだろう彼女の着には、毛玉が確認できた。

（他の店員と話してるのも見たことないし、友達いないタイプの間でしょ、あれ。稼いでも遊び相手いないとか、可哀想。何のために働いてんだか）

仕上げにエプロンの紐を結び、黒一色のカチューシャ

を付ける。腰回りに尾となる部品を括り付けると、女性は店内へと向かった。バックヤードでの静けさから一転して、女性スタッフの周りを賑やかな声が覆っていく。(生活のためだけだとしたら、こういう店じゃなくてももっと良い場所があるでしょうに。中途半端な気持ちでやってるから、私みたいになんか出ないのよ)

* * *

コトリ、とコーヒーとカレーライスが男性客の前に置かれた。視線をウエイトレスの手元から机上のコーヒーに移すと、目の前で繰り広げられる会話を避けるように、一切の音を立てることなく口へと運んでいく。淹れたてを証明する湯気が、男性の眼鏡をあつという間に曇らせていった。

「ごゆっくりお過ごし下さいや」

数秒も経たず視界が再び戻った頃には、彼の目で行われていた会話もなくなり、奥の方に置かれたオムライスには新たな赤色が加わっていた。

男性客のいるテーブルでは、似た年頃の二人の男が彼の向かいに座っている。しかし男性客が二人のことを眺めていても、視線が交わることはなかった。

(何で連れて来られたんだっけ。俺、いても変わんないよな。帰りたい。無理だけど)

壁際を選んだ男性に見向きすることなく、男たちはそれぞれ行動を起こしていた。一人の男は行き来するウエイトレスを吟味し、もう一人の男は先程置かれたばかりの料理にスマートフォンを向けていたのである。

「お前の料理も写真撮っていい？」

「メイドも良さげな子ばかりだし、もつと楽しめよ」

「どーぞ。いや、別に他の安い店もあったじゃん」
暫くすると、満足そうに顔を綻ばせた彼らが男性に話しかける。しかし、男性の返答は他二人と比べ、冷ややかな反応であった。

(大体この手の店って無駄に高いんだよな。食いに来てるのに、女の愛想に大金払える奴の感情が掴める気がしない。そんな奴と友達やってたみたいだけどな)

シャッター音が鳴り止むのを待ち、男性客はスプーン片手に目の前のカレーに目を向ける。それは、彼の友人がカメラレンズを向けたいと頼むことを、男性も理解はできる形状であった。

このメイドカフェのモチーフである猫の輪郭がライスによって形成され、その上に海苔で目や口、髭にあたる部分が置かれている。ルーは猫の顔の周りに縁取られるように掛けられていて、肉球を模した具材が浮き出ている。しかし、この見た目に男性は躊躇いを抱くことなくスプーンで掬い、口に入れた。

(不味くはないけど、サービスマテリアル感だよね。やっぱり食事よりは娯楽要素強いかな)

黙々と食べる作業を続けながら、男性はぼんやりと視線をテーブル外に外していた。目的のない目は、あちこちに動き回るウエイトレスの姿、仲間と楽しんでいる客の姿、店内を彩る統一的な飾りを無作為に映し出している。何度も店内を往復していく内に、ある一点に男性客の目は止まった。

(女の一人客もいるんだ。単なる観光か、お仲間を求めて来てるのか、つてところかな。一人つてことを考えると同志は少なそうだけど)

視線はそのままに食事を続けながら、時々求められる言葉のやり取りに適当な相槌を返していく。男性の思考

は同じテーブルを囲む友人よりも、女性客へと向けられていた。

(服装とかは結構地味だな。それに、多分だけどずつと同じウエイトレス見てる。知り合いか？ わざわざやって来て様子見か。女の付き合いつて怖いものあるしな)

スプーンを空になった皿に置き、忘れかけていた湯気の消えたコーヒーを手取る。一瞬戻した視界の先で男二人の様子を確認すると、先程料理を運んできたウエイトレスと話を弾ませていた。

* * *

カラリという音と共に扉が開く。丁度通りかかった者が足を止め、視線を音の方に向けて、用を終えたのだろう男性たちが扉の中から出てくるところだった。満足そうに笑っている二人組と、不満そうな表情を浮かべる一人である。

(でも、金を払ってサービスマテリアルを受けていることに変わりはない。同じ穴の貉だ)

扉から、ガラス越しに見えるその店内に視線を移す。昼過ぎということもあってか、店内は賑やかで繁盛しているように、その者は感じ取った。

(男と女、単独に複数の者、サービスマテリアルを与える側と受ける側。多種多様な人間が集まっている)

彼にとつて、中の世界は縁遠い場所だ、入りたいという思いが湧くことはなかった。しかし、道路に面した大きな窓から店内を見渡せるその場所は、中で過ごす人間たちを窺うのに適していた。

(ここは店員が面白い。格好はもちろん、態度も狡猾なものだ。不必要な装飾にどんな価値があるのか。それ

を見に来る客も、何がしたいかさっぱりだ)

彼は視線を進行方向に戻すと、再び歩を進めた。彼の目的地はここではない別のところに存在している。立ち止まった時間を取り戻すかのように、足を素早く動かしていった。

(しかし利害が一致しているからこそ、全て成り立っているのだ。理解できないからと声をあげても野暮なだけでしかない)

覗き込んだ店から遠く離れて、人通りの少ない路地に入っていくと、彼の目的地は目前に迫っていた。

(十人十色、それでいい。そこから利害の合う奴を見つけて使って、使われる。この平等な関係だけを築いていけば良いだけだ)

彼が手を掛けるまでもなく、その入口は既に半分程開いている。その者の到着が誰かに待たれていたことを、僅かな隙間が物語っていた。

(俺だって、生きるために媚を売って食べ物を買っているのだ。人間を利用しているのは、彼らとそうは変わらないだろう)

入口に顔を入れ、猫撫で声をあげる。待つまでもなく重い足音とささやかな匂いが、彼に近付いてきた。

「ニヤーン」